

木村兼葭堂の交友と知識情報

有坂道子

The Network of Acquaintances and Intellectual Information of Kimura Kenkado

はじめに

- ① 地域蘭学における大坂
 - ② 木村兼葭堂
 - ③ 兼葭堂と大槻玄沢
 - ④ 兼葭堂と宇田川玄随
- 結びに

【論文要旨】

地域蘭学の展開を考えるにあたり、これまでの在村蘭学研究において都市域を扱った研究が少なかった点をふまえ、本稿では、江戸時代中・後期に大坂で活躍した町人知識人である木村兼葭堂を取り上げ、蘭学者との交友内容を明らかにすることを通じて、いわゆる「蘭学者」ではない兼葭堂の、蘭学との関わり方について考察した。

兼葭堂は、造り酒屋を営む商人であったが、文人、蔵書家、文物収集家、本草・博物学者として著名で、きわめて広い交友関係を持っており、交遊の様子は彼の残した日記や取り交わされた書状から読みとることができる。兼葭堂は当時の大坂を代表する知識人であるとともに、多方面にわたる活動の中に蘭学知識の影響が見られ、蘭学者や蘭学関係者とも交流している。ここでは、大槻玄沢と宇田川玄随が兼葭堂に宛てて出した書状を素材に、彼らの間でどのような知識や情報が求められたのか、互いをどのように位置づけていたのかについて検討を加えた。

大槻玄沢が兼葭堂に宛てた書状からは、兼葭堂が玄沢に西洋物産に関する情報やオランダ語を始めとする外国語の訳述を依頼していたこと、一方の玄沢は兼葭堂の本草・博物学者としての知識を求めていることが知られる。また、宇田川玄随の書状では、兼葭堂の卓論や新説に対する期待が示され、蘭学者である彼らに有益な知識を与えうる人物として兼葭堂を評価していたことが分かる。

兼葭堂は蘭学者としてではなく、博物学者としての求知心を持って蘭学的知識を積極的に吸収しようとし、蘭学者の側も、兼葭堂のような蘭学に対する学問的好奇心を持つ人々から影響を受けていたと言える。それぞれが得意とする分野の知識を交換することで、知的刺激を受けていたのである。

兼葭堂と同様に、蘭学知識や情報を求める人々は多く存在しており、彼らを含んで蘭学の広がりを考えていく必要がある。

はじめに

西洋起源の新知識・新技術あるいは思考態度や文化などが、近世日本にいかなる影響を与えたかについては、蘭学の展開と関わってこれまで多くの研究が進められてきている。ここで改めて触れるまでもなく、医学など自然科学の分野でその意義が検討されてきたのははじめ、政治・経済・思想・文化などのさまざまな領域にわたり、直接・間接に受けた影響とその後の展開の様相が明らかにされてきた。

なかでも、早く一九三〇年代に提起された蘭学の性格づけをめぐる議論は、その後の蘭学史研究に多かれ少なかれ影響を与えている。この議論は、蘭学が個別の学問史としてではなく、歴史的にいかなる役割を保持したかについて、近世封建制との関わりの中で性格づけをおこなうことを課題としていた。そこでは為政者との関係に主眼が置かれ、とくに幕末期以降は「庶民的蘭学」が断絶し、為政者の側に立つことを目指した武士層によって蘭学の軍事科学化が決定づけられたとされてきた。⁽¹⁾

この評価に対し、蘭学を教える蘭学塾は多くの場合医学塾であり、幕末期蘭学の一般像を為政者志向の武士中心に見るのではなく、在村蘭方医の広がりに見るべきであるとして、在村蘭学の研究が進められた。その結果、蘭学塾門人帳から地方出身者を割り出す作業を通じて、蘭学を学んだ者のうち、帰村して地域医療をはじめとする在地での活動に入る者が相当数存在することが明らかにようになってきている。門人帳の分析という数量的把握によって幕末期を見た場合、蘭学の動向は、兵学への質的転換という側面のみでは描けない様相が立ち現れてくる。⁽²⁾

こうした在村における多様で活発な活動が明らかになるにつれ、その実態を地域的な広がりや地域特性の中でとらえることが必要とされて、地域蘭学という概念が提示されている。地域社会と深く結びつきながら

展開している蘭学を、地域蘭学という視点から見直すことで、その構造をより明確に把握することができると考えられる。

一方でこの概念は、豊富な「在村」蘭学の研究に比して都市域における研究が少ないことも意識している。蘭学と関わり深い江戸や長崎、大坂などは、いわゆる在村蘭学とはまた別の展開を成していると考えられるが、それぞれの都市域の特性を含めた様態の検討は充分であるとはいえない。それら以外の都市域においても同様のことは言い得るであろう。多くの人と物資、知識・情報が流通する都市では、蘭学そのものだけでなく、その周囲を取り囲む背景を見ることも必要である。そこでここでは、蘭学の発展について早くから注目され研究が続けられてきた大坂に目を向けてみたい。

① 地域蘭学における大坂

大坂の蘭学は、橋本宗吉（宝暦十三～天保七年（一七六三～一八三六））に始まるといわれる。そしてその全盛期が緒方洪庵（文化七～文久三年（一八一〇～一六三三））の適塾の時代にあることは誰もが認めることである。確かに、オランダ語を理解し、西洋文献の解説を通じてその内容を学習することを蘭学とするならば、天才的な語学力によってさまざまな分野の西洋書を翻訳した宗吉をもって大坂蘭学の祖とすることに間違いはない。在村蘭学研究の手法をそのまま大坂でおこなうならば、十九世紀の大坂に展開した本格的な蘭学を、宗吉なり、適塾なりから問うということになる。蘭学を狭義に解釈すれば、大坂の蘭学は江戸などよりずっと遅れて始まったことになる。

しかし、都市における蘭学、なかでも大坂における蘭学の展開を考えると、そこに至るまでの段階を見過ごすことはできない。従来の研究が明らかにしているように、蘭学者による蘭学研究が始まる以前の段階

に、次代における蘭学の盛行につながる特性を見ることができるところからである。大坂の学芸風土や町人学者の業績などは、蘭学を受け入れる素地としての大坂の特性を顕著に示しているものとしてよく知られている。³⁾

ただ、誤解のないように付け加えるが、例えば質屋の主人である間重富（宝暦六、文化十三年（一七五六）一八一六）は、師である麻田剛立および同門の高橋至時とともに、天文暦学分野において画期的な業績を上げ、西洋の天文知識を取り入れつつ実証的で合理的な天文学を打ち立てた人物として町人学者の好例に挙げられるが、決して蘭学者ではない。彼らの天文暦学研究は、当時の蘭学者のレベルをはるかに抜いているが、日々の観測データから導き出した理論と漢訳洋書の知識に基づいたものであって、剛立も重富も蘭語を読むことはできず、自らが蘭学者であるとの認識もなかった。だがこの一例をとってみても、実証に徹する思考態度や天文理論に対する深い認識理解が、一町人によってなされていることには大きな意義がある。と同時に、豊後国杵築藩医の職を捨てて天文学の考究を選んだ剛立や、大坂定番同心の至時らと、身分を越えて協働していることも注目すべき点である。

一方で、町人学者をはじめとした個人の活躍が特徴的であったために、これまでの研究では個人の突出した業績の評価に傾きがちであったともいえる。蘭学を含む大坂の学芸が、個々人の業績の積み重ねによって進展してきたことはその通りであるが、大坂に蘭学が生み出される背景として十八世紀後半をとらえる際には、そうした個人をとりまく学芸環境を広く見る必要がある。個人を軸としつつも、個人と個人とのつながり、蘭学を含む諸々の知識や情報のやりとりなどから、当時の状況を広がりとしてとらえる視点をもつことが大切といえよう。

つまり、幕末期の蘭学前史としてのみ彼らを位置づけ、その時期の大坂をとらえることには慎重にならねばならない。蘭学研究を目指したいわゆる蘭学者ではない以上、蘭学者の範疇で彼らの知識を云々しても、

それはたんに知識の切り売り以上にはならない。むしろ、そうした知識のやりとりも含めて、当時の知識のあり方、人々の志向や意識を実態としてみる中で、当時の人々が蘭学あるいは蘭学に連なる知識をいかにとらえていたかを示すことが必要となつてこよう。幕末以前の大坂という地域で、蘭学のアマチュアである人々から蘭学者が生み出される過程を直線的に跡づけるのではなく、当時の知的環境の中でそうした知識がどう扱われたかをまず意識すべきと思われる。

したがって、本稿では蘭学者あるいは蘭学そのものを正面から検討するのではなく、そうした知識の広がり、情報の流れに注目した考察を、木村兼葎堂を通しておこないたい。兼葎堂を取り上げる理由は、第一に、学芸活動において当時の大坂を代表する人物であること、第二に、多方面にわたっているその活動に蘭学知識の影響が見られること、それと関連して、知識や情報のやりとりと蘭学者をはじめとする蘭学関係者との交流が見られることによる。本格的な蘭学が展開する直前の時期に、蘭学知識を含むどのような知識・情報が取り交わされていたのかを兼葎堂を通して見るといのが本稿の目的である。

ただし、本来ならば兼葎堂その人を全体としてとらえた後にそうした意義づけをおこなうべきであるが、後述するように兼葎堂が興味を示した分野は多岐にわたるため、ここでは蘭学につながる知識の在り方に関わって見ていくこととする。

② 木村兼葎堂

木村兼葎堂は、元文元年（一七三六）大坂北堀江の造り酒屋、坪井屋に生まれた。通称は吉右衛門、のち多吉郎（太吉郎）、名は孔恭、字を世肅、号は巽斎・遜斎、堂号を兼葎堂といった。商家の主であるとともに、書籍・文物の収集家で物産に詳しく、多芸の人として知られる。並

はずれた人脈の広さを持つことでは他に類を見ない。兼葭堂は短い自伝を残しているが、その中で示される経歴によれば、兼葭堂が幼時から興味を持ち師を持った学芸は、本草・物産学と画、そして儒学であった。従学した師としてあげられているのは、本草・物産学では津島恒之進、小野蘭山、画においては大岡春卜、柳沢淇園（柳里恭）、鶴亭、池大雅、儒学では片山北海である。従学といっても家業のある身であり、大坂を離れて弟子入りしたわけではなく、大和郡山の柳沢淇園には粉本で、京の津島恒之進には主として書状を通じて受業した。ただし、小野蘭山には天明四年（一七八四）、兼葭堂四十九歳の時に誓盟状を入れて正式な内門の形を取っている。また、名物多識の学のため奇書を嗜好し、書画碑帖や地図をはじめとする諸々の文物を収集して「考索」の用としたという。収集の対象は、日本、中国そして「蛮方」に及んでいる。自伝には続けて、酒ではなく烹茶を好んだこと、馴染まなかったものとして古楽管弦、猿楽俗謡、碁棋、諸勝負、妓館声色をあげ、弱冠より壮歳の頃まで詩文を精究したことが記される。この自伝によって、兼葭堂の志向や興味がどのあたりにあったのかをおおよそ知ることができる。

兼葭堂については、すでに幕末期に、兼葭堂の子孫の依頼で暁鐘成が『兼葭堂雜録』五冊（安政三年（一八五六）序、同六年刊）をまとめ、当時子孫の手に残されていた兼葭堂の遺筆類を公刊した。人物研究としては早くに高梨光司が『兼葭堂小伝』（兼葭堂会、大正十五年（一九二六）刊）を著し、一九六〇年代からは水田紀久により一連の研究が続けられている。⁵⁾ それら以外にも、兼葭堂が関わりを持ったそれぞれの分野での活動について多くの論考がある。蘭学を意識したものに限って言えば、人的交流の中から医家・蘭学者を取り上げた中野操や、語学と本草学を中心に兼葭堂の蘭学知識とその交流をとりあげた瀧川義一の研究があり、兼葭堂の学問傾向に意を払ったものとしては唯一まとまったものとなっている。⁶⁾

兼葭堂研究の基礎史料としては、日記、書状、著述、蔵本類があるが、本稿の課題に関わるものとして日記と書状について簡単に紹介しておく。『兼葭堂日記』（以下『日記』と略）は、その日の出来事を書き付ける一般的な日記とは異なり、その日往來のあった人々の人名を書き上げたいわば人名簿である。兼葭堂四十四歳にあたる安永八年（一七七九）から、六十七歳で亡くなる享和二年（一八〇二）までの二十四年間のうち、天明元年（一七八一）、寛政四年（一七九二）、同七年、同九年の四年間分を除いた二十年分が現存している。⁷⁾ ただし、兼葭堂は享和二年の一月二十五日に没しているため、最後の年は正月十日までの記載であり、実質的には十九年と十日分の日記ということになる。兼葭堂の生涯のうち、最後の三分の一が人名簿の形で残されているわけである。人名簿の体裁であるから、まれにその用向きが短く書かれることはあるものの、情報としては人物の出身地ないし居所が記されることがあるくらいで、具体的な交遊内容についてはほとんど知ることができない。また、当然のことながら『日記』以前、つまり安永七年以前や『日記』が欠けている年については兼葭堂の日常交際が不明であるので、たんに現存する『日記』に名前の有る無しを見るだけでは交遊の有無をはかることはできない点は注意を要する。

書状は、まだ公に知られていないものもあり、あくまでも概要にとどまるが、兼葭堂が差し出した書状としては五十通ほどが知られ、宝暦初年と推定されている多胡玄岱宛書状がもっとも早い時期のものである。兼葭堂宛の書状としては百二十通ほどがあり、宝暦十四年（明和元年（一七六四））の那波魯堂のものもとても古い。この年兼葭堂は二十九歳である。以後時を追って残存する書状点数が増えるが、往復書簡ともに最も多いのは寛政期の書状である。もともと、書状の伝存は偶然的要素に大きく左右されるため、実際にやりとりされた書状の実数がどのように推移したかはわからない。『日記』や書状だけでは史料の限界が

あるものの、これらは兼葎堂が自らの世界を豊かに展開させている時期にあたり、そこから兼葎堂の日常交遊の一端を見ることはできよう。

兼葎堂に蘭学知識をもたらした経路は、まず蘭学者が想定される。そこで、兼葎堂と関わり深い大槻玄沢と宇田川玄随を取り上げ、彼らとの交流がどのようなものであったのかを見ていく。

③ 兼葎堂と大槻玄沢

(1) 『一角纂考』と『六物新志』

兼葎堂の自伝では、書籍の収集とともに、「考索」のため収蔵に努めた種々の収集品を挙げ、「右ノ類アリトイヘトモミナ考索ノ用トス、他ノ艶飾ノ比ニアラス」と続けている。収集品のうち「唐山器具」には「奇ヲ愛スルニ非ス、専ラ考索ノ用トス」の割り注が付される。「考索」という言葉は兼葎堂による造語ではなく、『和漢三才図会略』の序においてすでに林鳳岡が使用している例が見られるが、兼葎堂は自伝中で三度も繰り返し用いて自らの収集が「艶飾ノ類」ではないことを述べている。このことは、自伝の最後で「世人余カ実ヲ知ラス、豪家ノ徒ニ比ス、余カ本意ニアラス」と言っていることから分かるように、兼葎堂の収集についてそのような評価が広がっており、そのことが兼葎堂にとって相当地に不本意であったことを示している。たしかに、兼葎堂がいくらか「毎年受用スル所三十金ニ過ス」「百事儉省ニアラス」今日ノ業ヲ成ンヤ」と弁解してみても、万巻といわれた蔵書や諸器物類は、人々の目にそう映ったのもやむをえなかつたと思われる。

しかし、たんに言い訳として「考索」という言葉を持ち出しているわけではない。兼葎堂なりに「考索」の成果を現そうとしたのが、『一角纂考』の刊行であったといえるだろう。『一角纂考』は、兼葎堂が所蔵

するアンドルソン (Johan Anderson) の『グリーンランド地方地理志』にある図と記述によって、解毒万能薬ウニコール (一角) の原料を確定した書である。一角は一角魚 (イッカク)。鯨の仲間でイルカに似るが、角のように延びた歯牙を持つ) の歯牙からつくられるが、当時は一角の原料について諸説あり、なかでも想像上の動物である一角獣すなわちユニコーンの角であるとする有力な説があった。一角に関する和漢書・西洋書の記載を調べ、先の西洋書に至ってその真説を知った兼葎堂は、調べた成果をまとめて『一角纂考』を成したのである。

この書の成立には大槻玄沢 (宝暦七〜文政十年 (一七五七〜一八二七)) の手助けがあったことはよく知られている。その経緯は『一角纂考』下巻巻頭で兼葎堂が、後序で玄沢が、それぞれ記しているが、玄沢によれば天明五年 (一七八五) 十月、長崎遊学の途次、大坂で兼葎堂を訪ねた折に話題が一角に及び、兼葎堂から『グリーンランド地方地理志』の一角魚の図説を示され、該当部分を訳出するよう依頼を受けた。玄沢は該当部分を写して長崎に赴き、修学中に阿蘭陀通詞の本木蘭臯 (良水) にも尋ね、翌六年五月江戸への帰途に再び兼葎堂を訪ねて原書を借り、江戸に戻ってようやく訳を完成させたというものである。⁹⁾ 兼葎堂によれば、訳が成ったのは天明六年の十二月であった。

ところで、玄沢が長崎遊学に際して記した紀行文『瓊浦紀行』を見ると、¹⁰⁾ 長崎への往路来坂した玄沢は、十月二十四日にはじめて兼葎堂を訪ね、以後大坂を発つ十一月七日までは毎日兼葎堂と会っているが、二十六日に「四半頃ヨリ北堀江兼葎堂へ行ク 雅談アリ 暮過迄物語ル 珍品ヲ見ル 奇説モ多シ 尾兎狼徳重 (クルンランデヤグリーランド、筆者註) ノ地志ヲカリ来ル」とあるのに始まり、二十七日「尾兎狼徳重地志一角説写ス」、二十八日からは「一角説ヲ訳ス」、晦日「終日一角説ヲ訳ス」とあって、玄沢が該当部分の筆写と訳出のために連日努力している様子が分かる。そして十一月二日に「一角志訳文稿卒業」とあり、

ひとまず訳業を終えたことが知られる。玄沢は、大坂滞在中に該当箇所を写しただけでなくすでに訳出を試みていたことは、この記載により明らかである。その後、長崎で通詞の力も借り、また兼葭堂に原書を借りて江戸へ戻ってからも訳出を続けたわけで、成稿までは丸一年以上かかっている。玄沢自身は、江戸へ戻ってまもなく仙台藩の医官に新任され多忙となったことを遅延の理由としているが、一方で玄沢の語学力はあまり高くなかったとされること¹¹⁾から、そうした蘭語の読解力の問題も一因であったと思われる。

『一角纂考』は、上巻で兼葭堂がそれまで調べていた一角に関する和漢書の記載を挙げ、下巻で玄沢に依頼した経緯とその訳文を載せている。そしてこの『一角纂考』を公にするに当たって兼葭堂は、玄沢がこれ以前にすでに訳述していた他の稿も一緒に刊行することを提案した。結果、『一角纂考』を後に付すかたちで、兼葭堂蔵版で合刻されたのが『六物新志』（稿本段階の書名は『西産緒言』）である。内輪向けの刊行は天明八年（一七八八）とされるが、流布本が書肆から公刊されたのは寛政七年（一七九五）になってからである¹²⁾。

『六物新志』の刊行については、玄沢は自分が「和蘭学」に微力であるうえ、初学のころに訳したものなのでなおさらであるとして、はじめはこの申し出を辞退した。しかし「木君（兼葭堂）懇求の勢已まず、許諾せざるを得ず」（原漢文、以下同）¹³⁾、結局了解することになった。それについては兼葭堂も「大槻氏、余ガ懇請ノ篤ヲ以テ已ムコトヲ得ズ、而テ両ナガラ相許諾ス」（原漢文、以下同）と述べ、兼葭堂たつての願いによって刊行を受諾したことが知られる。玄沢は「庸才曲学之所為」であるものを公刊することをかなり躊躇していたらしく、「此実、木君利世の高誼に感じると、千里の交を全うせんと欲するとに由って、強いて其の需に應ずるのみ」であると、兼葭堂からの申しかけに應ぜざるを得なかった点を強調している。

『六物新志』巻首の題言・凡例を天明元年に創案していることから、将来的な刊行意図を持って書きためたものはあったであろうが、玄沢の著訳述書は起草から成稿、刊行までに長い年月をかけているものが多い。またこの天明八年には、蘭語学入門書『蘭学階梯』（天明三年（一七八三）成稿）を上梓し、有馬文伸の筆録による問答形式の啓蒙書『蘭説弁惑』を成稿している。芝蘭堂を開き、仙台藩医として多忙な時期でもあり、稿を整えることが十分ではなく公にするのは尚早と思ったのであろう。一面、『蘭学階梯』の刊行が、福知山藩主で蘭学者として知られる朽木昌綱の出資援助によるとされるように、出版費用は大きな問題であった。兼葭堂は『一角纂考』を刊行するにあたり、自らの蔵版でもって玄沢の著述も公刊することで、訳者である玄沢に報いようとしたものと思われる。玄沢の言からは兼葭堂に押し切られた感が強いが、西洋物産の解説・考証を内容とする『六物新志』のスタイルは、後の『蘭畹摘芳』につながるものともなっており、兼葭堂の蔵版でなされた出版は玄沢にとって大きな利になったといえる。宇田川玄随は兼葭堂に宛てた書状の中で、寛政七年の流布本の公刊について「玄沢六物新志も御世話にて刊行御図り下され候由、感荷（受けた恩を心に深く感じる）こと）同様に存じ奉り候」と表現している（四月十日付書状。書状については後述）。結果として、蘭学の啓発という面では『六物新志』は玄沢の著の一つとなり、兼葭堂は出版費用の拠出を通じて、蘭学の普及に対し経済的な援助を与えることになったと言えよう。

(2) 兼葭堂宛て大槻玄沢書状の検討

兼葭堂と玄沢の関係を今少し見ておきたい。次にあげる書状は、兼葭堂宛の書状を貼り継いで卷子仕立てにした「先人旧交書牘」と仮題される書状集の中に収録されているものである¹⁴⁾。この中に玄沢が兼葭堂に宛てた書状が二通含まれるが、そのうちの一通は三月二十二日付のもので、

書状中に「天野行蔵」が急に帰坂したと述べる。天野行蔵については未詳であるが、『日記』によれば寛政十年（一七九八）五月九日に暇乞いのため兼葭堂を訪れてから、翌十一年四月十五日の記事まで現れないので、この間大坂を離れていたと考えられ、書状は寛政十一年（一七九九）三月二十二日と推測される。

…扱者、ド、ネウス之内レーフルコロイト之事御尋被下候、訳文致し候、大二手間取申候、忿劇中ながら略訳仕候ヲ入御覧候、御分り被成候哉、如何、御不審之事候ハハ又々可被仰下候、雪割草之由、漢名ハ何に候、此節急ニ如何様之御用ニテ御尋被下候や、委曲之訳為御知被下度近便ニ奉頼候、ド、ネウス才覚訳文等ニ大二手間取申候、多非御高免可被下候、自是も追々申上候事候ハ、御閑暇ニ御返答奉頼候…

『日記』の寛政八年（一七九六）八月十四日の欄外に「江戸丸ノ内松平相模守ヤシキ稲村三伯弟子芝正作ト、ニース持参也」とあって、兼葭堂は寛政八年にすでにドドネウス草木誌を見ている。今回はドドネウス草木誌のうち「レーフルコロイト」について玄沢に尋ね、訳文を求めていたようであるが、玄沢は大いに手間取ったと繰り返し述べ、翻訳に相当苦労した様子がかがわれる。翻訳の際に、おそらくその挿図などから「レーフルコロイト」が雪割草であることはわかったが、その漢名について兼葭堂に問うており、玄沢が兼葭堂の本草知識の教示を願っていたことが知られる。

この「レーフルコロイト」は、「エーデルレーヘルコロイト」、つまり雪割草の別名を持つ三角草（ミスミソウ、英名[Whiteleaf]のことである。葉の形によって三角草とも、州浜草（スハマソウ）ともいわれる。玄沢門下生による筆録本『蘭畹摘芳』の初編巻之九に「エーデルレーヘルコロイト」の項があり、「独度涅烏斯九百十九号ニ曰ク」として語義と形状、産地、性効が挙げられているが、これはおそらくこの時兼葭堂の間

い合わせによって訳した訳稿がもとになっているのであろう。ちなみに、ドドネウス草木誌の図版を模写し解説を付した『譯度涅烏斯絵入』（著者不明、早稲田大学蔵）上冊中に「エーデルレーヘルコロイド」があり、漢名を「樟耳細辛」、和名を「サンカクサウ」としている。筆録本『蘭畹摘芳』には和名や漢名についての記載はないが、小野蘭山も『本草綱目啓蒙』で樟耳細辛をスハマソウにあて、「一名ミスミグサ又ユキワリトモ云」としていることから、¹⁵⁾兼葭堂も樟耳細辛を漢名として玄沢に伝えたことであろう。

さて、「先人旧交書牘」に収められているもう一通の玄沢書状は、次に掲げる十二月十六日付のものである。

追々御細簡相達辱読、嚴寒御座候得共愈御勝常被成御起居奉遙賀候、随而拙家老少依旧申候、乍慮外御披念被下度候、先便者唐山戯画御惠贈被下、毎々千里之御芳情不知所謝候、御聞及之通寡君いまた幼穉、即指出申候処殊之外大悦、千万辱奉多謝候、一高充国東下に付縷々被仰下承知仕候、毎々出會仕候、小石門人とも二三子、宇田川玄真方ニ寄宿仕り、追々出會仕候事ニテ御座候、一蘭畹摘芳第七巻目石川ノ参着候事と存候、没食子はやく懸御目度、十巻目石川へ相廻し置申候、不遠参り可申存候、御覧可被成候、洋画之考も摘芳中ニ御座候、御覧可被成候、○ペルヒア皮の事も承知仕候、

一 柚木先日も文通御座候、追々出来可申と存候、小森生甚た感心之事ニ御座候、面談相祈候事ニテ御座候、
一 蘭山翁老健折々出會仕候、本草啓蒙之事ハ未承候、
一 珊瑚之図ハ石川ノ参可申と奉存候、鼻烟盒訳文羅旬語〔ラテン語の模写か〕未たとくと解了仕かね延引仕候、
一 長州田村雲沢御尋申上候処、暫時御出會候而已にて便舸有之、直

二発帆之由、同人も遺恨と奉存候、其御地無事着之便候而已にて
いまた自郷里ハ便無御座候、

一相願候鶴満寺古鐘之義、大略被仰下辱奉謝候、頼候人嘸悦申候義

二奉存候、上木之上早々御患投奉願候、

一小紙被遣、小弟拙筆之義被仰下恥入奉存候、何分春中相考、何成
共相認可入賞覽候、

一高氏へ御状即伝達仕候、

一柴田翁不相替候、近所ゆへ度々出会毎々御噂共出申候、何卒今一
度ハ御面会を相折候事にて御座候、

一貴家御相続之方も未だ無之、御居御世話も有之、御多忙之由奉察
候、何卒はやく御相応御座候様仕度御義奉存候、

年内無余日候へハ、躬陰御互ニ多事御座候、折角御保重御加歳可被
成候、御家内様かたへ宜々奉頼候、万々来陽日出度申賀候、段々之
貴答御挨拶旁如此御座候、恐々拝頓首

大槻玄沢

臘月十六日

木村多吉郎様

拝復

まず書状の年代であるが、本文一条目に高充国の東下のこと、四条目
に小野蘭山と折々に出会うことが書かれている。小野蘭山が、幕命によ
り医学館で本草学を講じるため江戸に下ったのは寛政十一年（一七九
九）三月である。一方、高充国は『日記』の記載で見ると、寛政十二
年（一八〇〇）九月十一日に兼葭堂を暇乞いに訪れ、翌十三年（享和元年）
六月三日に帰坂している。したがって、この書状は寛政十二年十二月十
六日のものと推定される。本文最後の十一條目に兼葭堂の後嗣がまだ定
まっていないことが記されるが、兼葭堂が一度迎えた養子を離縁したの
は寛政十一年二月頃のことであり、以後亡くなるまで相続人は決まらな

かった。また追而書に「寡君いまた幼穉」とあるのは、仙台藩主であつ
た伊達斉村が寛政八年に急逝したため生後間もなくして後を継ぐことにな
った政千代を指しており、書状を寛政十二年として問題はない。なお、
高充国（明和八〜天保五年（一七七一〜一八三四））は、眼科医の家系
に生まれ、杉田玄白につき蘭方を修めた後、大坂心齋橋筋平野町で開業
した眼科医で、幕末に活躍した蘭方医高良齋は充国の甥（充国実弟の養
子）にあたる。この時の東下は玄白のもとで修学するためと考えられ、
充国三十才の八カ月半ほどを蘭医学習得に費やしていたと分かる。

ところで、本文二條目に『蘭畹摘芳』について書いた部分がある。す
なわち、『蘭畹摘芳』の七巻目を石川を通じて兼葭堂に見せていること、
「没食子」を早く兼葭堂に見せたいと思ひ十巻目もまわしていること、
「洋画之考」も『蘭畹摘芳』中にあるとすること、である。石川は、玄
沢とも兼葭堂とも親しい洋風画家、石川大浪（明和二〜文化十四年（一
七六五〜一八一七））に違いない。

『蘭畹摘芳』は、大槻玄沢が蘭学に関して語ったさまざまな知識や訳
文などを収めた蘭学啓蒙書である。天明から文政に至る四十余年の長き
にわたって門弟が筆録していたもので、その一部が選び出されて文化十
四年（一八一七）に刊行された。門人による筆録本は、初編・次編・三
編・四編の各十巻と附録二巻の全四編四十二巻から成るが、刊行本は初
編三巻からなる一冊のみで、続刊は計画されていたものの実現を見な
かった¹⁶。刊行本の玄沢の凡例は寛政十年（一七九八）三月の日付を持つ
ので、刊行に向けて早い段階から準備はおこなわれていたと思われる。
筆録本に収載されている記事のうちで年代が示されているものを見てい
くと、必ずしも年代順に採録されてはおらず、各編各巻の成立時期は明
らかではない。それでも初編に関していえば、巻首にある山村昌永の識
語が寛政四年（一七九二）であり、記事中で年代の分かるものでは巻之
三に収録された「風鳥」の天明八年（一七八八）が最も早く、巻之八に

収録された「阿片訳説」の寛政十年（一七九八）が最も遅い年代記載となり、大概はこの時期に記述された記事が、初編に多く採録されていると推測される。

ここで、玄沢の書状にある「没食子」について筆録本の目次と合わせると、「没食子」は初編の巻之十に採録されていることから、書状の「十巻目」は初編のそれを指していると思われる。早く見せたい、という玄沢の言からも十巻目は出来上がり直後に送っていると思われる、寛政十二年末に初編の最終巻が成立したと見られる。従って初編全巻の成立もこれ以降と見ねばならない。

先に兼葭堂に渡った七巻目、すなわち初編の巻之七には「ケルレル贈兼葭堂書」があり、寛政六年（一七九四）にオランダ商館医のケルレル（Bernhart Keller）が兼葭堂に送った手紙を玄沢が訳した文が載せられているほか、「拂郎察鏤版貴婦人像図下訳文」があつて、これが書状に言う「洋画之考」に当たると思われる。フランス語で書かれた貴婦人像図下の文字やマークを訳注した中に、マークの図案にある「独角獣」に関する記述があり、これを指していると考えられるからである。ウニコールの原料である一角は、『一角纂考』や『六物新志』が明らかにしたように一角魚の歯牙であるが、既述の如く世間では一角獣の角であるとする有力な説があつたため、こうした知識を知らせたのであろう。

書状では『蘭腕摘芳』の七巻目と十巻目が挙がっているが、現在内閣文庫に収められている兼葭堂旧蔵の『蘭腕摘芳』は、初編の巻之一から巻之六までとなっている。しかし明らかのように、兼葭堂の手元には巻之七以降も届けられていたわけである。

書状の内容からは、互いの知人について近況を報告している以外に、相互に依頼ごとをしている様子が読みとれる。「ペルヒア皮の事も承知仕候」（二条目）、「珊瑚之図ハ石川々参可申」、「鼻烟盒訳文羅句語未たとくと解了仕かね延引仕候」（五条目）と言った文言から、兼葭堂は玄

沢に西洋物産に関する情報や外国語の和訳を依頼しており、玄沢の方からは、ある人物の依頼で「鶴満寺古鐘の義」（七条目）を兼葭堂に問い合わせさせていて、好古の人である兼葭堂の知識、あるいは上木の世話を依頼している。南長柄（現大阪市北区長柄東）の鶴満寺に伝来する梵鐘は、もと長門の長済禅寺にあつたもので、「大平十年二月」の中国年号を含む銘があつて、『撰津名所図会』巻之三（寛政十年（一七九八）刊）などにも載せられている。このほかに、書画の贈答もしばしばあつたことが、「小紙被遣、小弟拙筆之義被仰下」（八条目）、「唐山戯画御恵贈被下、毎々千里之御芳情」（追伸部分）などの表現からうかがわれる。

兼葭堂は、玄沢から得た蘭学の成果を実際に取り入れ、利用している。幕臣で漢詩人の大田南畝（寛延二〜文政六年（一七四九〜一八二三））は、最晩年の兼葭堂と親しく、兼葭堂との問答書『遡遊従之』（享和二年（一八〇二）成立）を著しているが、南畝の問いに対して兼葭堂は「蛮説」「蛮訳」を挙げて回答しており、その出典として『六物新志』と『蘭腕摘芳』を示している。すなわち「肉豆蔻」「サフラン」は『六物新志』に、「合生草」「没食子」は『蘭腕摘芳』にその説が載るとしている。このように、兼葭堂と大槻玄沢はそれぞれの得意分野について互いの知識を交換し合い、兼葭堂は玄沢に西洋文物の知識と語訳を、玄沢は兼葭堂に本草・博物知識を求めていたことが分かる。そしてそれぞれが持つ情報のネットワークを頼んで、さまざまな依頼を日常的におこなっていたのである。

④ 兼葭堂と宇田川玄随

次に掲げるのは、「先人旧交書牘」に収められている四月十日付の宇田川玄随（宝暦五〜寛政九年（一七五五〜九七））の書状である。玄随の目を通して、蘭学と関わる兼葭堂の姿が書き表されているので、以下

に見ていきたい(翻刻中の□は虫損及び破損)。

再陳、嚙々爾來御發明御卓論等可有御座候、御執筆之御緯余も御座候ハ、御教示被下候様奉待望候、其御地藏屋敷ニ罷在候役人、村尾左右衛門・竹内要左衛門・長沢清左衛門右三人之内へ御出し被下候へハ兼而申達し置候間、随分月二兩度宿之飛脚便御座候ハ、いつにても御教示被下候ハ、右へ御出し可被下候奉頼上候、將又今度敵邑津山之町医高島道友と申者東都へ修行ニ罷出候而帰郷仕候、便道貴地へ暫滞留仕候而乍修行治療仕候者、則拙書相附上仕候、渠ハ外科ニ御座候、若御懇意之御方様御用筋も御座候ハ、御都合次第御治療御命可被下候様御先容奉頼上候、同人小子弟子分ニ御座候間、何分奉頼上候、呉々も御新説等も御座候ハ、里耳を驚し度御教示奉仰止候、春來病用公私紛冗且同人出立急与相成□□□勿々奉呈梧右候、御推覧可被下候、以上

一翰致啓上候、爾來者久々不奉玉音、先以向暑之際愈御平康可被成起居大賀之至奉存候、誠ニ其後ハ風塵紛絮乍存御契闊罷過背本意候、乍去毎度二三同社中ニ而御平安之御様子斗拜聴、益御風流之御宿好不相渝、近來ハ蘭学等ニも御波及被成候趣、吾党之同臭ハ奉遙敬候事ニ御座候、玄沢六物新志も御世話ニて刊行御図被下候由、感荷同様ニ奉存候、小子も年來家業之本科少々取懸居候所、一小部翻訳出来、内兩三卷書肆刊行仕候てハ、御同好之故ニ先達而玄沢々幸便有之候節一部奉呈左右候、定而相達御垂覽も被下候半、自余ハ書肆之都合次第上木致候由申し候間、其節陸統供覧可仕候、為差儀も無御座候得とも、任幸便御即答も同度、旁匆卒如此御座候、恐惶謹言

孟夏十日

宇田川玄隨

晋(花押)

木村吉右衛門様

人々□□□
(御中カ)

書状の年代は、追伸記事により寛政六年(一七九四)四月十日と判明する。この時玄隨は津山藩医として江戸にいた。追伸中に、津山の町医高島道友が江戸での修行を終え、帰郷の途次に大坂に立ち寄ることになったため、手紙を持たせるので便宜を願う、との旨が記されるが、『日記』の寛政六年四月二十三日に「江戸高島道友宇田川状持参」、同日の欄外に「津山高島道及始来」と記載されている。これによって本書状が『日記』に記される「宇田(田)川状」そのものであることも分かる。

玄隨が書状で紹介するところによれば、高島道友は外科を専門とする玄隨の弟子分であり、しばらく大坂に留まり修行を兼ねて治療をするという。そのため、大坂での治療先の斡旋を兼葭堂に依頼している。道友は津山元魚町の町医師で、寛政四年(一七九二)十月に津山で玄隨がおこなった「開臓」に立ち会い、翌五年二月に玄隨の推挙により藩医に挙げられた。翌六年二月に江戸へ出て、玄隨のもとに身を寄せつつ修行をしているが、書状にあるごとく二カ月足らずでの帰郷となった。『日記』では初対面から四日後の四月二十七日に訪問記事があるのみで、道友がいつ大坂を發つたのかは不明である。その後津山に戻った道友は、翌七年二月から行方不明となり搜索願が出されている。¹⁹⁾

玄隨が道友に兼葭堂を訪ねさせ、患者の紹介を依頼しているのは、兼葭堂への信頼と大坂の地で兼葭堂がもつ人脈を考えてのこと他にない。その意味では、兼葭堂は医者仲間よりはるかに頼りになる人物であった。道友に限らず、大坂を訪ねる人物が兼葭堂の知人の手紙を携えて、大坂滞在中の便宜・世話を依頼する例がままた見られる。手紙を持たないまでも、誰の知人であるかを告げて兼葭堂に面会を求める人も多い。いずれも見知らぬ地でまず頼るべき人物と考へてのことである。また、大坂に知人が住んでいるときにはその人物が紹介者として同伴すること

もある。享和元年（一八〇二）三月一日に兼葭堂を訪ねた大槻玄沢門下の中井厚沢（安永四〜天保三年（一七七五〜一八三三））は、『日記』の欄外に「芸州広嶋塚本町 中井厚沢 宇田川塾生 漢学ノ為ニ上京 宿無之ヨシ下江 森川へ行 同伴来 天野二行」と記されている。兼葭堂は厚沢を宇田川門人としているが、そうであれば寛政九年（一七九七）に没した玄随の後を継いだ玄真であるだろう。厚沢は後に、蘭医学をはじめた広島に伝えることになる人物であるが、兼葭堂とごく親しい書家で篆刻家の森川竹窓（宝暦十三〜天保元年（一七六三〜一八三〇））をまず訪ねて、竹窓に伴われて兼葭堂、そして天野行蔵を訪ねており、これもそうした例と思われる。

さて本文初めで、江戸の蘭学社中において兼葭堂の様子が噂になっており、兼葭堂がかねてからの風流相変わらず近來は蘭学などにも波及して、玄随周辺の蘭学仲間たちは遙敬していると述べている。兼葭堂が近來徐々にその興味の範囲を広げて、蘭学にも及んできたというのは、『一角纂考』に見られるような西洋書を活用しての考証、蘭学者との間での蘭語・蘭説の検討⁽²⁰⁾、あるいはその前提として西洋書の収集、阿蘭陀通詞やオランダ商館長・商館医らとの交流など、兼葭堂が積極的に蘭学的な諸知識と接しているさまを表現しているのであろう。書状は続けて兼葭堂が玄沢の『六物新志』の刊行を図ってくれたことに、わがことのように感謝の意を表している。『六物新志』は、この後寛政七年（一七九五）正月に書肆から公刊され、江戸においては翌八年三月二十七日に売弘許可が下りた。前述の如く、兼葭堂の計らいによる出版は玄随を含めた蘭学社中からも喜ばしいこととして受け取られていたことがわかる。書状全体を通じて、蘭学社中の中でも優れた蘭学者として信頼の厚かった玄随が、兼葭堂に対して非常に丁重であることは興味深い。兼葭堂宛の書状であるという点を差し引いても、玄随が兼葭堂の知というものを期待していたことは追伸部分でもうかがえる。兼葭堂の発明・卓論

等の教示を待っているとして、手紙の取次に津山藩大坂蔵屋敷の役人三人の名を挙げ、彼らにはかねて申し達してあり、月に二度の飛脚便があるのでいつでも教示されたいと願っている。たんに文飾としてならば、ここまで具体的な手順を示すこともなからう。追伸の最後でも「呉々も御新説等も御座候ハ、里耳を驚し度御教示奉仰止候」と念を押している。「発明」「卓論」「新説」などの言葉は、玄随が兼葭堂に求めた知の内容を示しており、玄随ら蘭学者が学説を立てていく上で、有益かつ刺激的な知識を与えてくれる人物として兼葭堂を評価していたということである。

本文最後で、一小部の翻訳が刊行されたというのは、わが国初めての翻訳西洋内科医書として名高い『西説内科撰要』である。寛政五年（一七九三）から文化七年（一八一〇）にかけて刊行され、外科が主流であった蘭医学界に一つの画期を与えた。玄随は、「御同好の故に」玄沢を通じて内科専門書であるこの書を兼葭堂に奉呈し、続刊も上木次第に供覧することを約束している。同好であるということは、つまり蘭学そのものに対する共通の理解の上に両者が立っていることを玄随が認めていることを示している。それゆえ玄随も、西洋医学の専門書である本書を兼葭堂に献呈しているわけである。

ただ、そのことと分けて考えねばならないのは、兼葭堂に対して玄随が蘭学者的な知識を求めていたわけではないということである。この玄随の書状のように、兼葭堂と蘭学との関係を直接にとらえる表現は、実はそれほど多く見られない。もちろん事実として、蘭学者やその周辺の人々と交流があり、兼葭堂自ら蘭学知識を控えた『蘭音類聚』という書があった（関東大震災で焼失⁽²¹⁾）ことなどから、従来より兼葭堂と蘭学とのつながりは指摘されてきたところである。しかし、蘭学者の側が兼葭堂をどのような存在として認識していたかについては、ほとんどその手がかりはなかったと言つてよい。

その中でも「蘭学者相撲番付」(早稲田大学蔵)はよく知られたものであり、兼葭堂は西前頭二十六枚目にその名が挙がっていて、当時の蘭学界においてその存在が認められていたことを物語る。この番付が芝蘭堂の新元会の席で作られたのは、玄随が亡くなった翌年の寛政十年(一七九八)十一月のことで、当然兼葭堂の活動が十分認識されていた時期である。大坂の人物では他に、玄沢門の四天王に数えられ、翻訳に秀でた橋本宗吉(西小結)と、仙台藩への大名貸で名高く、玄沢ととくに昵懇であった蘭品収集家の山片重芳(東前頭十枚目)の都合三名のみが選ばれている。他の二人と比べて兼葭堂の番付は高くないが、これはいはば当然のことで、兼葭堂は蘭学者たらんとして蘭学を志向していたわけではなく、あくまでも自らの意を傾注する本草・物産学、事物考証と関わって蘭学知識を吸収していたのである。先に挙げた『遊遊従之』の中では、兼葭堂は「唐山紅毛齋来ノ品物ニ必用ト云ヘキモノ薬品ノ他コレ無シ、或ハ其余皮革・碗青・風繭・亜鉛ナランカ……」²³と言っており、モノを想定してのことではあるが、兼葭堂の評価を端的に表している。その意味では貪欲な知識欲⇨求知心の結果であり、蘭学はあくまでも手段であったと言えるだろう。

しかしそうであっても、玄随の書状からは、兼葭堂の蘭学への関心あるいは蘭学知識との関わり方を肯定的に評価する見方が、江戸の蘭学社中にあつたことを読みとることができる。番付に名前が載るのもその現れの一つである。むしろ蘭学者の側もそうした知識を得て、蘭学そのものの研究に活かしていったのである。さらにいえば、蘭学というものがどこまでの広がりをもっているのかという問題とも関わってくる。時代が進むにつれて蘭学の内容やそれが含む範囲は変化し、また人々が蘭学をいかに認識していたかについても、それぞれの時代による違いや個人差がある。しかし、これまで見てきた点から明らかなように、玄沢や玄随のような藩医レベルの蘭学者が、兼葭堂に対して持っているのは、同

類、仲間内の感覚である。彼らの段階にあつては、蘭学に対する知的好奇心を持つ人々もまた、蘭学界を支える要素であつたといえる。

結びに

大槻玄沢が『六物新志』や『蘭晚摘芳』など、啓蒙書としての性格を持つ著述を多く残していることは、世に蘭学を正しく認知させることを自らの役割の一つと考えていたことを示している。兼葭堂もそこに共感を持っていたことは、『一角纂考』下巻のはじめで「大槻氏ノ世ノ為ニ利ヲ興スノ志ヲ佐ケテ、内外医術万一ノ資ト為スコトヲ欲スルノミ」と述べていることからうかがえる。この時の両者は、いわば啓蒙という水準で同じ面に立っている。蘭学に関する知識では絶対的に優位である玄沢も玄随も、和漢の本草・物産に詳しい兼葭堂の意見を探り入れて自らの学業に活かそうとしている。それは蘭学者としてではなく、蘭学に一定の理解をもちつつ和漢洋を問わずさまざまな有益な知識や情報をもたらしうる人物としてである。このことは、この時期の蘭学者が蘭学知識を深めていく過程で、蘭学者同士の限定された範囲で専門知識を交換しているだけではなく、兼葭堂のような知識人、つまり蘭学に対する学問的好奇心を持つ人々から影響を受けていたことを示している。両者の目指しているところは異なるにせよ、相互補完的に知識を交換することで互いの学問的欲求を満たしていたということであり、新しい学問領域を形成しつつ進展した蘭学の、十八世紀後半段階のあり方を現しているとも言えよう。

本稿では、兼葭堂と二人の蘭学者との知識交流についてしか考察できなかったが、兼葭堂は蘭学者以外にも、さまざまな方面から蘭学に関する知識を得ている。²⁴例えばティチング(Isaac Titsingh)やファン・レーデ(J.F. van Reede tot de Parkeler)らオランダ商館関係者、吉雄幸左衛

門・楢林重兵衛をはじめとする阿蘭陀通詞、桂川甫斎（森島中良）や司馬江漢ら蘭学者周辺の人々、そして朽木昌綱や松浦静山といったいわゆる蘭癖大名⁽²⁵⁾など、その交遊関係はそのまま当時の蘭学のネットワークにあてはまるものである。個々のつながりを検討し、彼らが蘭学というものをどのように位置づけていたかを明らかにすることは今後の課題である。そして、兼葭堂の周辺には、兼葭堂と同じく、求知心をもって蘭学あるいは蘭学に連なる知識や情報を求める人々があり、この課題はこれまでたんなる「好事家」として低い評価しか与えられてこなかった彼らをも含んで考えていく必要がある。

註

- (1) 蘭学の性格評価に関わるものうち、主なもののみをあげる。武士中心の蘭学観を提示したものとして、原平三「蘭学発達史序説」(『歴史教育』一一一三、一九三六年)、いわゆる「封建制補強説」を採るものとして、伊東多三郎「洋学の一考察」(『社会経済史学』七一一三、一九三七年)、沼田次郎「幕末洋学史」(『刀江書院』一九五一年)、同「洋学」(吉川弘文館、一九八九年)、同「封建制批判説」を採るものとして、高橋碩一「洋学論」(三笠書房、一九三九年)、同「洋学の興隆と反封建的世界観」(『岩波講座日本歴史』一三、岩波書店、一九六四年)、同「洋学思想史論」(新日本出版社、一九七二年)、幕末期蘭学の軍事科学化を指摘するものに、佐藤昌介「洋学史研究序説」(岩波書店、一九六四年)、同「洋学史の研究」(中央公論社、一九八〇年)など。
- (2) 田崎哲郎「在村の蘭学」(名著出版、一九八五年)、同編「在村蘭学の展開」(思文閣出版、一九九二年)、青木歳幸「在村蘭学の研究」(思文閣出版、一九九八年)など。
- (3) 中野操「大坂蘭学史話」(思文閣出版、一九七九年)、有坂隆道編「日本洋学史の研究」I-X(創元社、一九六八―九一年)など。
- (4) 原本は現在所在不明であるが、模刻された「兼葭堂先生遺書」が残っており、『花月庵藏兼葭堂日記』註(7)付録として複製されている。以下、本稿での引用はこの複製による。
- (5) 水田紀久「近世浪華学芸叢談」(中尾松泉堂書店、一九八六年)、同「浪華郷友録」(近代文芸社、一九九六年)、同「水の中央にあり 木村兼葭堂研究」(岩波書店、二〇〇二年)、その他兼葭堂を扱ったものに、古くは鹿田静七編「兼葭

堂誌」(私家版、一九〇一年)、新しくは中村真一郎「木村兼葭堂のサロン」(新潮社、二〇〇〇年)など。

- (6) 中野操「木村兼葭堂をめぐる医家たち」一―七(『医譚』復刊二〇―三〇、日本医学学会関西支部、一九五九―六四年)、同「木村兼葭堂と蘭学者たち」一―六(『大阪春秋』四―七、大阪春秋社、一九七四―七六年)。瀧川義一「木村兼葭堂の蘭学志向」(一) 語学・本草学を中心に(『科学書院』一九八五年)など。
- (7) 原本のうち、大阪歴史博物館所蔵の羽間文庫本五冊十八年分については、『複製兼葭堂日記』および『兼葭堂日記翻刻編』(兼葭堂日記刊行会、一九七二年)として刊行されている。その後新たに見つかった花月庵本二冊二年分は、原本複製『花月庵藏兼葭堂日記』(兼葭堂日記刊行会、一九八四年)として刊行されている。いずれも水田紀久氏による解説と索引が付されている。

- (8) 兼葭堂に関する書状は各地に散在するが、瀧川義一・佐藤卓弥編「木村兼葭堂資料集 校訂と解説」(一)(蒼土舎、一九八八年)に七十五通ほどの往復書簡が収録されている。なお、註(14)参照。
- (9) 経緯については、両者の説明に若干表現の異なるところもある。兼葭堂によれば、『グリーンランド地方地理志』の訳出を玄沢に依頼したとき、玄沢は旅中で参考すべき書がないためこれを辞し、三、四度誦読してその大意を示すのみであったが、翌年長崎からの帰路に再び兼葭堂を訪ねた際に再度兼葭堂が懇請して和訳を引き受けてもらったという。

- (10) 津本信博編「近世紀行日記文学集成」二(早稲田大学出版部、一九九四年)所収。以下、引用はこの書による。関連する論文に、村田忠一「大槻玄澤・司馬江漢の西遊と木村兼葭堂―日記にみる大坂での交流―」(『適塾』三一、一九九八年)。
- (11) 鳥井裕美子「大槻玄沢の語学力」(『大槻玄沢の研究』洋学史研究会編、思文閣出版、一九九一年)。
- (12) 影印復刻『六物新志・一角纂考』宗田一解説(『江戸科学古典叢書』三三、恒和出版、一九八〇年)。なお、宗田解説では、流布本の初版が二書肆版、後版が三書肆版とされるが、多治比郁夫氏は流布状況と刊記の変化から初版が三書肆、後版が二書肆とされている(多治比郁夫「兼葭堂版」、『杏雨』創刊号所収、一九九八年)。

- (13) 以下、引用は『六物新志・一角参考』註(12)による。
- (14) 中尾堅一郎氏蔵。影印復刻『木村兼葭堂采翰集 先人旧交書牘』(混沌会・木村兼葭堂顕彰会編、中尾松泉堂書店)が近刊予定。
- (15) 重訂版「本草綱目啓蒙」(弘化四年(一八四七年))。
- (16) 影印復刻「紅毛雑話・蘭曉摘芳」菊池俊彦解説(『江戸科学古典叢書』三一、恒和出版、一九八〇年)。宗田一「大槻玄沢『蘭曉摘芳』について」(『日本医史

学雑誌』三三一―一、一九八七年)。

『蘭畹摘芳』は、大部の筆録本がありながら、結局刊行は一冊で終わってしまったが、その理由として、蘭学知識を考証的・啓蒙的に紹介する本書に対し、実用書としての利用に堪えうる蘭学書が現れはじめたことが指摘されている(矢部一郎「大槻玄沢の西洋薬物学・博物学への関心と受容紹介」、前掲『大槻玄沢の研究』所収)。

(17) 宗田一「大槻玄沢と西洋物産学」(前掲『大槻玄沢の研究』所収)。

(18) 杉本つとむ「翻刻磐水先生著述書目」(『早稲田大学図書館紀要』一六、一九七五年)。

(19) 『岡山県史』八、六三〇頁。下山純正「美作在村蘭学概論」(前掲『在村蘭学の展開』所収)。幸田正孝「宇田川玄随(槐園)の履歴―津山藩の『江戸日記』『勤書』などから―」(『豊田工業高等専門学校研究紀要』三四、二〇〇一年)。なお、幸田氏の論稿については下山氏にご教示いただいた。

(20) たとえば、『大阪木邑兼葭堂老人雑鈔』(筆者・成立年未詳、大阪府立中之島図書館蔵)には、「杜松」の項に瓦列ニス(ガレニス, Galenus)の説を宇田川玄随訳として載せており、兼葭堂は玄随にも蘭語訳を依頼していたことが知られる。

(21) 焼失以前に『蘭音類聚』を見た新村出がメモを取っており、それによれば蘭学知識に関する百科全書風のメモや舶来書名三、四十種が記載されていたという。新村出「兼葭堂の一遺著に就て」(『新村出選集』二、養徳社、一九四五年)。

(22) この他、寛政八年(二七九六)の「洋学者芝居見立番付」(早稲田大学蔵)では、番外の作者にその名が見られる。

(23) 引用は『遊遊徒之』(『大阪資料叢刊』一、大阪府立図書館、一九七一年)による。

(24) 拙稿「市井の蘭学―木村兼葭堂にみる―」(『日本史研究』四〇五、一九九六年)。同「西欧文物の受容と大坂の知識人―履軒・永錫・兼葭堂をめぐって―」(『ヒストリア』一五一、一九九六年)。

(25) 松浦静山と兼葭堂に関しては、近年では松田清『洋学の書誌的研究』(臨川書店、一九九八年)が具体的な交流の一端を紹介している。

〔付記〕なお本稿は、二〇〇〇・〇一年度科学研究費補助金(奨励研究A)による成果の一部である。

(京都橘女子大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇〇三年三月二七日受理、二〇〇三年七月一八日審査終了)

The Network of Acquaintances and Intellectual Information of Kimura Kenkado

ARISAKA Michiko

With regard to the study of the development of regional Rangaku, among the research that has been conducted on Rangaku in villages there has been little that has dealt with urban regions. Thus, the topic of this paper is Kimura Kenkado (1736-1802), an intellectual who was active in the latter part of the Edo Era, and makes a study of Kenkado's association with Rangaku, though he himself was not a "Rangaku scholar", through bringing to light his relations with his friends and acquaintances who were Rangaku scholars.

Though Kenkado was a merchant who operated a sake brewing business, he is famous for being a literatus, collector of books, a collector of cultural artifacts, and a scholar of natural history. He had an extremely extensive network of acquaintances and friends and it is possible to learn about his friendships through the diaries he left behind and the exchange of letters between himself and friends. As well as being a good example of an Osaka intellectual of his day, there is evidence of the influence of Rangaku on his activities covering a wide range of fields and his interaction with Rangaku scholars and persons associated with Rangaku. Using the letters sent to Kenkado by Otsuki Gentaku and Udagawa Genzui, I also make an examination of the nature of the knowledge and information that these men were seeking and how they regarded each other.

We learn from the letters sent by Otsuki Gentaku to Kenkado that Kenkado sought from Gentaku information on Western commodities and relied on him to translate Dutch and other languages, while Gentaku sought from Kenkado knowledge he had as a scholar of natural history. The letters of Udagawa Genzui reveal a great interest in Kenkado's clever arguments and new theories, from which we may conclude that these Rangaku scholars regarded Kenkado as a person who was able to give them useful information.

Kenkado sought to actively absorb information on Western subjects through his thirst for knowledge as a scholar of natural history and not as a scholar of Rangaku, and it is also fair to say that the Rangaku scholars too were influenced by people like Kenkado who had a scholarly curiosity in Rangaku. This exchange of information relating to the various fields in which they had their own expertise served as an intellectual stimulus.

There were many people like Kenkado who were interested in obtaining information on Western subjects, and these people need to be included in studies on the spread of Rangaku.